

黄の廠

(おうのみせ)

シドウエヤ

海南灘（ハイナングランド）に、夜が訪れる。

東シナ海に浮かぶ、欠月の形をした人工島、海南灘。中華民国と中華人民共和国による初めての融和の地として造られてから七十五年が経ち、いまは国籍の必要でない混沌（カオス）の都として大洋に浮かんでいる。ハノイ連邦の成立以来、軍事・政治・経済みなながら状況が逼迫している両国からの支援は途切れ、結局は国家ではなく、複数の資本がこの島を支えていた。

守宮公司（サンクンコンス）とウェリタス重工は、ともにこの海南灘に本社を据える企業複合体（コングロマリット・カンパニー）だ。海南灘はこれら企業のおかげで、ハノイからも日本からも商都として自我を保ち続けている。守宮公司もウェリタス重工も、軍事部門を所有し、企業は複数の国家軍隊に影響力を持っている。島の建設当時から、市長と市議会が存在しているが、いまやこの島の真の支配者は資本家たちだった。

そういった成立事情から、海南灘には多様な人種が集まっている。漢人や新漢人はもとより、アジア一帯の民族で数えられない人種はいないだろう。そして多様な人種というのはその意味にとどまらない。

華々しい電飾に彩られ、闇が降りて来てから活気づくのが、香海路（シャンハイルー）だ。国家でない海南灘ならではの飛びぬけた歓楽街が、この香海路に集まっている。規制されることのない性産業も、この島の重要な産業のひとつだ。総じてここに暮らす人々は豊かで、金遣いも派手だったから、こういうものにも金を惜しまない。廠（みせ）を覗けば豪奢に着飾った娼たちが待ち受けている。廠々はそれぞれ趣向を凝らして客を歓待し、客はこの世の贅を凝らした店の中で、一夜限りの夢を見る。

香海路では、女たちの廠を「白」、男たちの廠を「黒」という。外見が美しいなら男でも女でも構わないというのがこの住人たちの流儀で、どちらも立派な廠を連ねている。

その香海路の片隅に、ひっそりと目立たない門扉の店がひとつ、ある。それがジラフの働く廠、香海路では「黄の廠（おうのみせ）」と呼ばれている。

ジラフがその仕事を始めたのは、実入りのよさと、あんまり物事をどうこう考えない自分の性格が、この仕事にむいていると言われて誘われたからだった。

三年前からこの廠に入っている。香海路でも知る人ぞ知る黄の廠で、ジラフは「仕入れ」と呼ばれる仕事をしてきた。

「仕入れ」と言っても、ジラフの仕事は白い廠や黒い廠の「仕入れ」とは少し違う。黄の廠の「仕入れ」は客の要望を聞いてから、予定を立てて商品を仕入れることが多い。客は担当の「仕入れ」に直接、自分のほしい商品を言って来るので、「仕入れ」は廠の商品から客の好みを選び出すこともあるし、いいのがなければ探しに行くこともあるし、わざわざ調達することもあった。

黄の廠は白や黒と違って客の相手をするのは娼たちではない。黄の廠の商品は、黙って客に身を委ねる。もう声は出ないので仕方ない。……香海路に唯一の（そしてもちろん、海南灘に唯一の）黄の廠の商品は屍体だ。巷間で屍体愛好者（ネクロフィリア）と呼ばれる好事家が、ジラフたちの客だった。

ネクロフィリアといっても好みは人それぞれだ。きれいな娘の屍体を好む者もいれば、少年がいいとか、老人がいいとか、腐ってないものもいいとか、死後硬直のさなかの硬い屍肉がいいとか、腐敗をはじめて体温と同じような熱を持っているものもいいとか、もっと腐敗が進んでぐちゃぐちゃのものがいいとか。人それぞれだ。ただ言えるのは、屍体を犯す趣味があるような人間はさして多くないし、その趣味を全うするために必要な金をばらまける人間も少ないということだ。だから白や黒の廠と違って、黄の廠ではだれもが上客だ。危険な趣味だけに、安全もかねて彼らは大枚をはたく。

そして「仕入れ」は、金さえもらえばどんなことでもした。調達とはそういうことだ。つまり、まだ屍体になっていない者を客の好みのために用意するのだ。

「仕入れ」たちはそれぞれ商品の仕入れルートを持っている。その豊かさが、「仕入れ」としての力量の見せ所だ。客はたいがい、担当の「仕入れ」が決まっている。その客たちの嗜好を把握し、彼らの望むときに望む商品をそろえておけるかが黄の廠の「仕入れ」の使命だった。ジラフは毎日、朝から晩まで客のために海南灘中のモルグを駆け回る。客の嗜好に合った屍骸を見つけることがもはや生きがいに近かった。

ジラフ自身には、屍体愛好の趣味はまったくない。

用意された房で商品とよろしくやっている客たちは、たぶん人間が怖いのだろう。生きて人間とすることが出来ないから、彼らを罵倒しない、嫌わない、そして愛さない屍体と愛を交わすのだと、思っている。

別に、咎めだてすることじゃない。彼らはそのための金を払えるのだし、苦労して商品を用意してやれば彼らはジラフに大金を払ってくれる。それだけのことだ。そして人間はいつか死ぬ。それだけのことだ。

岸上はジラフの担当する客の一人で、かつ、良質な商品の提供者でもあった。

歳は二十七歳、この廠の客としてはかなり若い。職業は医者だ。医学生だった頃に、指導にしていた医局長からこの廠へ死体を卸す手伝いに誘われ、そのままこの廠の木乃伊になった。大病院に勤めているから並よりは収入がいいのだろうが、黄の廠に払えるほどのサラリーがあるわけではない。病院で出た屍骸を黄の廠に横流しすることで、廠からかなりの金が仲介料として岸上に流れている。彼はその金で、黄の廠にあがるのだった。

珍しい客だ、とジラフは思っている。医者で、見てくれもかなりの美青年だ。恋人に不自由しそうにもないのだが、あいにく趣味は人の道を踏み外してしまっている。

彼を担当して一年半になるが、ジラフは岸上の嗜好をつかみあぐねていた。たいていの客は、会うたびに、あるいは連絡を入れて来るたびに、うんざりするほど自分が望む商品について注文をつける。熱烈な想いを傾けて彼らはまだ見ぬ屍体の恋人について語る。自分で探せと言いたくなるが、そこをうまくコーディネートするのがジラフの仕事だ。ジラフはいつも、にこりと笑って「知道了（わかりました）、先生（シーサン）。それじゃあ、来週に」と言う。

そういう意味で、岸上はうるさくないから有難い。彼の嗜好は、自分より若い男の屍骸だった。十代後半から二十代半ばくらい。女がいいと言われたことは一度もない。人種も、髪の色も、体型も、条件をつけられたことがない。岸上の条件に合致する死体は多すぎるから、ジラフはいつも、適当に鮮度がいいのを見繕っていた。文句を言われたことは、一度もない。

岸上は、廠に来るとジラフが用意していた商品を黙々と抱く。終わったあとの屍体を始末するとき、射精の痕がなければ岸上も死体じゃないかと思えるくらいだ。ことが済んだ後、完全に落ち着くまで房（へや）からは出て来ないらしく、顔を上気させているのさえ見たことがない。房から出て来る彼の横顔を見て、本当は嫌なんじゃないかと思うこともたまにあるが、さすがに嫌で続けられるような敷居の低い趣味じゃあない。やっぱり、岸上は屍体と愛を交わすのが好きなのだろう。

金がかかることもあって、岸上は客として廠を訪れるのはせいぜい二ヶ月に一度、それ以外の性欲の処理はもしかすると生きている女かもしれなかった。岸上を見ていると、どうしてもネクロフィリアなどという趣味を持っている人間には見えないのだ。

その岸上が、ジラフに連絡を入れて来て「どうしても手に入れたい商品がある」と言った。客がこう要望して来るのは、かなり彼らの欲望が行き過ぎてしまったことを意味する。つまり、用意された屍体に満足するのではなく、目の前の手に入れたい人間を屍骸にしてくれという依頼であることが多い。それが、黄の廠でいう調達だ。

いままでジラフの用意した商品に文句をつけたこともない岸上だ。いきなり、調達を望んで来るなど飛躍しすぎじゃなからうかと思ったのだが、客がどうしてもほしいと言うのだから、ジラフはイエスと返事をする他ない。

三年この仕事をやって、ジラフは三人を調達した。もともとジラフはこんな廠に入るような暮らしをしていたのだ、調達することそのものに抵抗はさしてなかった。むしろそのために大枚を

はたく客たちを尊敬した。客の気が違ってるというのは、まあ、意外といいものかもしれない。ともかく彼らは、金に糸目はつけないのだ。

「それで、だれなんです」

「会って話そう。今日の夜、礼芳路（リファンルー）の樂園酒家（パラダイス・カフェ）で」
夜、ジラフが約束した酒家へと行くと、岸上は既に席についていた。あまり、こういう明るいところでは会わないのだが、改めて見ると青年医師の男ぶりはたいしたものだ。顔はすっきりと整っている。黒目がちの目は、どこか憂いを含んでいるように見えて人の気を引くだろう。長身でスーツも白衣もさまになった。きれいな女たちからの誘いなどこと欠かないだろうに。海南麦酒（ハイナンビール）を一人で飲みながら、ジラフを見つけると小さく手を振った。

ジラフが席につくと、人目につかないように一枚の写真をジラフに差し出して来た。

「彼だ」

「これが先生の調達希望？」

「ああ」

写真の中では、一人の青年が微笑んでいる。かなり、親しい人間にむける笑顔だった。歳は二十代半ばくらい。背景はどこかの部屋の中だ。ラフなシャツ姿だが、容貌が整っているので粗野な感じは受けない。繊細で、触れれば壊れてしまいそうな印象があるが、その微笑には傲慢なところも見受けられる。育ちもよさそうだ。これが岸上の趣味というわけだ。今後の参考にするか、とジラフはよくよく見凝めた。

「だれなんです」

尋ねると、岸上はあっさりと答えた。

「楊亘（ヤンゲン）。ウェリタス重工の社員だ」

「ウェリタス重工、ね。ホワイトカラーなんでしょう。いなくなったら騒ぎになりますよ」

ジラフたち「仕入れ」がなんでもする、と言っても、もちろん場合による。香海路の娼館の娘がいなくなったならそんなに騒ぎにはならないが、あまりにも真っ当な立場の人間だと、失踪すると警察が動くことがありうる。「仕入れ」がミスをすることで、黄の廠そのものが危険になることがあるのだ。黄の廠は明幫（ミンバン）の配下にあってトラブルを揉み消すことは難しくはないが、この海南灘はウェリタス重工ら複合企業体の力が大きいため、幫の力が及ばないこともある。この青年がどれだけの社員かによるが、場合によっては、警察よりずっと装備のいい重工の私兵が動き出す。それは、廠として歓迎できない。

「いや、平気だ」

岸上は首を振った。

「彼の家族は届けを出さない」

「どうしてです？」

「そいつは、俺の弟だ。肉親は俺しかいない」

「へえ」

ジラフは慌てて、写真と岸上とを見比べた。確かに、似ていると言えれば似ている。だが、楊は漢名だ。ジラフが不審そうに見ているのに気づいたのか、岸上は苦笑した。

「亘（わたる）とは……兄弟だと日本名で呼んでいるんだ、亘とは、父親が違う」

「それで肉親は他にいない、と」

「ああ」

「すぐにうちの商品にするんですか。もったいない、これならこの歳だって、黒の廠でかなり稼げる」

「調達だといくらになる？ それによるな」

「調達はまわりのカムフラージュに一番金を使うんですよ。それが足りないなら、あまりかかりませんね。先生にはいつもお世話になっていますから、サービスはさせていただきます。気を揉まなくてもいいですよ」

「それなら、黒には出さないでいいだろう」

ジラフがうなずくと、岸上はほっとしたように椅子にもたれた。これでこの写真に写っている青年の運命は決まった。かわいそうだけど、あんたの兄貴が悪いんだぜ、ジラフは写真の中で笑う青年に胸の中で囁いた。

「日取はいつがいいんですか」

「亘は、来週の頭から休暇で沖縄に行くことになってる」

「じゃあ、その前に」

「ああ。調達できたら連絡を頼む。……冷たいほうがいい」

「知道了（わかりました）、先生（シーサン）」

ジラフはいつものように笑って、仕事を受けた。

五日かけて、ジラフは楊の生活を調べた。岸上が「なにも言うつもりはない」と保障していても、楊の雇い主であるウェリタス重工の出方までは彼には保障できないからだった。

楊は岸上とは兄弟だが、別居していて、海南灘高台にある高級マンションの一室に一人で住んでいる。岸上は香海路からそう遠くはないかなり安い場所に部屋を借りているのだから雲泥の差だ。楊の父親は二年前に亡くなっていて、その相続物らしい。

楊亘の身の回りを調べながら、ジラフはため息をついた。苦勞なく育って来た青年だ。ウェリタス重工でも秘書部にいて、幹部候補だろうことはあきらかだ。将来を囑望されている。……とはいえ、個人的な事情で姿を消したりしたときに重工が動く可能性はあまりないだろう。まだ社員としても若いし、他殺体で海に浮かんだら話は違いうだろうが、死体が出て来なければ問題ない。

ジラフは楊の写真を見ながら彼を哀れんだが、もちろん岸上の依頼を断るつもりはなかった。本気で同情するようなら、この仕事はとっくに辞めている。

楊の休暇前日、会社からの帰り道でさらった。薬をかがせると瞬きをする間もなく墮ちた。酔いつぶれたような姿の楊を車に乗せて、ジラフは悠々と廠に戻った。

房に連れこみ、ベッドの上に寝かせる。楊の顔はとても安らかだ。薬でどんな夢を見ているのだろう。そしてその夢は、楊が見る最後の夢だ。いまや彼は、二度と生きては戻れない廠の中にいる。

岸上に調達が出来たことを連絡すると、明朝に来たいと言って来た。

「勿論、平気ですよ、先生」

にこやかな声で答えると、緊張したような引きつった笑いが、電話のむこうから聞こえた。他の客と同じように岸上は興奮している。お望みの商品を手に入れられるとあって、さすがに冷静じゃられないのだろう。

電話を切ったジラフは、どこか幻滅を感じている自分に気づいた。岸上は他の客とはどこかが違うと思いたがっていたらしい。確かにいい男だが、所詮はこの廠の客なのだ。人間を相手に恋愛をするのではなく、物言わぬ屍体を相手に性交するような男なのだ。

(そしてその相手がまた、父親の違う弟と来た)

調達相手に肉親が選ばれることは、珍しくはない。鬱積した欲望は身近な場所にむかいやすいと聞いていた。

顔をしかめて、ジラフは携帯(ハンディ)をスーツの内ポケットに滑りこませようとし、その手を止めた。楊をさらうために、彼に近づいてもおかしくないような仕立てのいいスーツを着ていたのだ。内ポケットなどにハンディを入れたら、着替えるときに取り忘れるに違いない。彼は大笑いしてため息をついた。着慣れないものを着ていると調子が狂う。

ジラフはいつものラフな格好に着替えると、楊の眠る房に戻った。

明日の朝、岸上が来る。彼が楊を抱くまでに体温をなくしておくためには、そろそろ殺しておくなければいけなかった。常軌を逸した欲望が、彼を殺す。理解できないと言いながら、それに

手を貸している自分はなんなのだろうとジラフは思った。

受け取れる金はいい。だが、自分がそんなものに対して執着していないのも知っていた。

「ジラフ、そいつが今日の調達か？」

声に振りかえると、部屋の扉を半開きにして立っていたのはジラフの同僚の阮（ルアン）だった。ジラフより十年は長くこの仕事をしている「仕入れ」だ。ジラフを「仕入れ」にと斡旋したのは他ならないこの男だったが、大陸から流れて来たらしいこと以外、この廠に来るまでの来歴はほとんどの人間が知らない。それなりに親しくしていたが、ジラフも、彼のことはほとんど知らなかった。阮という名前も本名かどうかわからない。どうやらインテリだったらしく、ふるまいはわざと粗雑にしているが、この界隈の「仕入れ」とは少し違っていた。もっとも、阮が変わっているのか、黄の廠の「仕入れ」だから変わっているのかは判断できない。

「お医者センセーのお好みか、このぼうやか。きれいな顔をしてるじゃないか」

「聞いてたのか？」

「このところ、廠も調達はご無沙汰だったからな」

「今回は調達とも言えない。簡単なもんだよ」

阮は肩をすくめた。

「余裕だな。もう手馴れたか」

「というより、ほとんど手間が要らなかった」

いつもなら、商品が失踪したあとに問題が起こらないよう、様々な工作をしなければいけないのだ。警察への口止めにはじまり、事故を装ったように死体を誤魔化すことだってあった。だが、今回はたったひとりの身内が依頼主だ。厄介な手順は不要だった。

「黒には出さないんだな」

「必要ないってさ」

「勿体ない」

「なあ、かなり稼げるよな」

「でも、プライドが高くて大変そうだ。うっかり逃げだしたりしたら大事になるか」

確かに、生きていれば黙って男に犯されるようなタイプではないだろう。だからこそ岸上は、ものを言わなくなった彼を望むのだ。

阮の言葉に相槌を打って、ジラフは棚から、廠に用意してもらった注射器を取り出した。中味がなんだか知らないが、黄の廠で使う毒薬が入っている。商品が苦しまずに死ねることがこの廠でもっとも大切に、それをかなえる薬だった。

傍に行くと、楊はぼうっとした瞳を開いていた。覚醒していたらしい。だが、意識がはっきりしているわけではないはずだ。どうせ商品になるのだから、という理由で、ジラフたちが調達に使う薬は強いものだったのから当然だ。ここで救出されても、脳は破壊されているから元の生活は送れない。もっとも、ここまで来て助け出された人間がいるなんて聞いたこともないが。

それでも、楊はジラフが覗きこむと訝しげな顔をした。

「君、は……？」

「俺はジラフ」

「だれ、なん、だ」

ジラフは笑った。そして、用意した注射針を楊の腕に刺した。楊は不思議そうな顔をする。けれどすぐに、意識が混濁して来たのだろう。ゆっくりと目を閉じて、そしてもう二度と開かなかった。

「先生が入る前に、洗うから。朝早いけど、手伝ってくれるか？」

ジラフが言うと、ああ、と阮は頷いた。

翌朝、約束の時間通りに岸上はやって来た。ジラフは彼にうやうやしく扉のキイを渡す。キイを受け取った岸上の手はかすかに震えていた。

だが岸上は至極満足そうに笑っていた。

「ごゆっくり、先生」

「ああ。有難う、ジラフ」

ジラフは廊下の奥へ進む岸上を見送った。やがて、楊の横たわる部屋の重たいドアが閉じる音が聞こえた。それを確かめてからジラフが身を翻すと、にやにやと笑いながら煙草を取りだしている阮と目が合った。

「そこにいたのか――」

ジラフが戸惑いながら聞くと、まあなと阮は肩を竦めた。

「どうだ、先生の反応は」

「珍しく緊張してる」

「ふうん、わざわざ調達しただけのことはあるってことか」

「そうじゃなきゃさすがに人殺しまではしないだろ」

「どうかな、あいつら、自分が殺したなんて思ってもねえだろう。よく似せたゴム人形でだって本当は満足できるのさ」

阮の台詞は確かかもしれない。屍体とやりたければ自分で調達すればいいのだ。彼らはそれをせず、肉食と同じで、屠殺はだれか下々の者にやらせる。いや、むしろ彼らは本意をかなえるために命を奪う必要ですらない。抱かせてくれと相手に懇願すればいいのだ。だが、客たちはそれをしない。

どうやって調達したのかと聞いて来る客さえ、この廠では稀だ。殺すなんて下賤な仕事の方法を聞かないことがマナーだなんて考える上流階級の客ばかりなのだ。そうじゃなければボタンひとつでお望みの屍体が出て来るんだと思っているかもしれない。

だから、彼らは自分の欲望が相手を殺したことにさえ気づかない。これが現実だと認識しているかどうか、本当は危ういのじゃないかと思えた。常軌を逸したファンタジーを満たす場所が香海路なのだから、うたかたみたいに生まれては消えるすべてが夢みたいなものに違いなかったが。

「この仕事をしていると」

阮が苦々しい口調で笑った。

「自分が人形師になった気分にならないか」

「人形師？」

「そう。あいつらは俺たちが用意した舞台の上で人形とダンスしてる。自分の幻想を満たしていると信じこんでいる客どもは結局、俺たちの操り糸でふらふら揺れてるだけだろう」

煙を吐き出しながらけたけたと笑う阮を見ながら、ジラフは顔をしかめた。

阮がなぜこの仕事をしているかは知らない。確かに、実入りはいい。ジラフも何人も手にかけ

ていたが、この仕事がやばいものだという感覚もさほどなかった。黄の廠には明幫のバックアップがあるから、いくらかの醜聞は揉み消してもらうことができる、という安心感もあるのだろう。だがそれだけでは捻じ伏せられない嫌悪感が普通の人間にはあるはずだった。

日がな一日生臭い死体とむきあいながら、なにが楽しくてこの仕事をしているのか、阮の言いようからすれば、舞台の上で踊る客たちを支配できるのが楽しいからだとも言いたげだ。

「客は客だろう」

ジラフが言うと、阮はさあと気のない返事をする。

「……そういや岸上は客つつてもなあ。仕入れもさせてくれるんだったな」

その言葉に含んだものを感じて、ジラフは眉をしかめて顔をあげた。

「だから、なんだよ」

「いや、ドクターが客だけならいい、仕入れの相手だけなら、いいんだけどな」

「その両方だからって特別なことはしてない」

「怒るなよ、おまえがだれかに執着するのは珍しいなって思っただけだ」

「そんなこと思ってない」

「まあいいさ、おまえは頭がいい分、人には絶対に本音を見せないからな。ドクター・岸上けっこう、便利な男だ。なにしろこの廠の客だからな、裏切ることもない。

おまえの言ってることは正しいっちゃあ正しい。客は客だ。……だから、肩入れはするな。この廠に来る客がまともなことはないんだからな！」

「肩入れなんてしてない」

「お医者センセーの本性が今回の調達で見えたってんなら、いいんじゃないのか」

揶揄する響きに、ジラフは怒りを覚えたがそれを押さえつけた。阮は深く息をつき、煙草をうまそうに吸い続けている。

調達をしてからというもの、岸上が廠に足を運ぶ機会はぱったりと途絶えた。はじめのうちこそ、病院から商品を受け取る折に顔を合わせていたが、数ヶ月するとそこですら見なくなった。かわりに商品を渡すのは岸上をこの道に連れこんだ医局長だった。岸上先生はどうしたんですか、と問うことは出来たはずだが、ジラフはそれを躊躇した。既に岸上を気にしているように思われていたことの記憶が不快感と共に残っており、商品提供をしてくれる医者がだれだろうと関係ないはずだ、と彼のことを考えないよう努めた。

自分自身、そのことで逆に躍起になっているような気がしないでもなかったが、日常を送る中では特に彼のことを思い出すこともなかった。なにしろ、岸上よりよほど癖のある客たちが相手なのだ。憶えているほうが難しかった。

楊亘のことは、あれから一月ばかりあと、海南日報のゴシップ記事に小さく載っただけで、問題は起こらなかった。死体は見つからないように処分したので、事件にはならない。楊亘という青年は見事にこの世界から消えてしまった。彼がどんな運命をたどったのか、知っているのはジラフと岸上だけなのだった。

なにかがおかしい、と違和感を覚えたのは、それから半年ばかり経った頃のことだった。

ジラフが礼芳路（リファンルー）で友人と飲んでいると、通りに似つかわしくない高級車が飯店（みせ）の前に止まった。漆黒のマスタングGTX。その酒家で飲むような人間には一生手に入らない車だった。すべてのガラスがスモーク処理され、黒光りする車体は不気味なほどだ。見たことのある同車種よりも一回り大きく見える。つまり、装甲化され、そのせいで車体が膨らんでいるのだ。そんな車に乗ろうとするのは幫かCC（コングロマリット カンパニー）の上層部の人間だけだ。店内はざわついていて、心当たりのない人間は、騒ぎに巻きこまれるのではないかと懸念していた。ジラフもその一人だった。黄の廠は明幫とつながりがあるが、ジラフ自身は幫の幹部など面識がない。大きな明幫の組織においては、ジラフは末端の労働者に過ぎないのだ。

マスタングから降りた女は、品のない礼芳路のネオンサインを受けてもそれとわかるほど、美しかった。血管の透けて見えるような白い肌に、赤い唇。マスタングと同じ漆黒の長い髪。身体を包むスーツもやはり黒く、強化処理がされたもので、女の見事な身体のラインを強調していた。すべての所作が限りなく不遜で、限りなく高慢だった。そんな女がなぜこんな場所に降り立ったのかだれも理解できていないだろう。腰には銃を下げている。腕には自身があるのか鏢（ボディーガード）はいない。女は戸惑うことなく、なにかを探すそぶりすら見せず、まっすぐにジラフのいる酒家の中へと歩き出した。酒家のざわめきは続いていたが、そうしながらだれもが女を見ていた。

女は困惑しているジラフの傍に立つと、冷たく笑った。

「あなたが、ジラフ？」

「.....あんたは」

女は空いていたジラフの隣に腰をかけた。ジラフの問いには答えなかった。

「人を探しているの」

ジラフは女がハンディに表示させた画像を横目を見た。ジラフはまったく表情を変えず、麦酒を口にする。余計なことを言うつもりはなかった。その画像の人物に見覚えがあるとなればなおさらだ。写っていたのは楊亘だった。

ジラフはあくまでも冷静に、女の正体を推測しようとした。警察ではない。警察は明幫と癒着しているから、黄の廠が検挙されるようなことはないはずだった。他に考えられるのは楊の勤めていたウェリタス重工の関係者か。それとも、彼の恋人か。

女はすぐにハンディをしまった。無駄なことは聞いて来ない。ジラフが知っているという確信があるに違いなかった。

「私が知りたいのは、この男の兄のことよ。あなたなら知っているんじゃないかしら、ジラフ」

「なにか知りたいんだ」

「彼がいまどこにいるのか、よ」

「残念だな、俺が知ってることを聞きに来てくれれば良かったのに」

ジラフははじめて女の顔を正面から見据えた。女はひるむことなく、美しい弧を描く唇で呟

いた。

「そう、それは残念ね」

女はジラフの耳元に顔を寄せた。

「気が変わったときには、いらっしゃい」

そう言うと、女は立ち上がって酒家を出て行った。漆黒のマスタングGTXは女を呑みこむと音もなく走り出す。それを確認してから、ジラフは飲んでいた仲間への挨拶もそこそこに酒家を飛び出した。

あとをつけられていないか確認したが、その様子にはなかった。それに、あの女にはジラフが黄の廠の「仕入れ」だということはわかっているのだろう。廠のことをいまさら隠し立てしても仕方ない気がした。

足早に廠へむかったジラフは、モニタールームで客の行為を見ていた阮を連れ出した。ジラフが混乱していたのは、楊のことではなく岸上のことを尋ねられたからだった。なぜ岸上が探されているのか予測も出来ない。いくつかの可能性を考えてはいたが、どれも確証はなかった。あの女がジラフの元に来たからには、岸上は病院にいないのだろう。なぜ岸上が姿をくらましたのかもジラフにはわからなかった。そのきっかけが弟の仕入れかどうかも定かではない。ジラフは岸上のプライベートを知らなかった。知っているのは、あの男の歪んだ欲望のことだけだ。

「どうしたんだ」

「調べてくれないか。漆黒のマスタングに乗ってる女で、歳は二十五にはなってないと思う。岸上のことを聞いて来た」

「岸上？ あの先生か？」

阮はあからさまに不審そうな顔になった。

「あの仕入れ以来、俺は会ってないんだ」

「ふうん、つまり飛んだな」

「なんで今更俺になんか聞いて来るんだ？」

「よっぽど手がかりがないんじゃないのか」

「……本当に探しているのは楊のほうかもしれない」

「詳しく話せよ」

自分が動揺しているのはわかっていた。口にしていることが支離滅裂だったからだ。

「悪い」

「顔に出ないところがおまえらしいな」

ジラフは顔面蒼白になっているつもりでいたのだが、そうは見えていないらしい。彼は舌打ちして、深く息を吸った。死体をめぐるトラブルであれば、ある程度は幫がなんとかしてくれる。しかし、客自身のトラブルに巻きこまれた場合はどうなるのか。そんなことは思ってもみなかった。廠と幫が危うくなった場合、ジラフごと切り捨てられることは眼に見えていた。

ジラフは女と会ったときのことを、はじめから阮に話して聞かせた。漆黒のマスタング、楊の写真、岸上のこと。話し終えたとき、阮は顔を歪ませていた。

「弟だったのか」

「そのこと、話してなかったか」

「なあ、ジラフ。あの先生はどっちが目的だったんだ？ 屍体愛（ネクロ）か、それとも弟の死か？」

「なに？」

ジラフは心外だというように阮を見た。

「怒るなよ」

「怒ってなんかない」

「なら大人しく聞いているんだな。調達の後に姿を消したって言うんなら、そもそも、弟を殺したかったんじゃないか？」

「……まさか」

「はめられたのかもしれない」

「そのために何人も屍体とやったって言うのかよ」

「さあ、俺はあのドクターがどこまで変態かは知らねえ……なんにせよ、女の正体を知るのが先決だな」

「わかりそうか？」

「さあな。けどそんな派手な女、幫に当たればすぐわかるだろう。

なあ、ジラフ」

阮は改めてむき直り、今度こそ青ざめて来たジラフの眼を覗きこんだ。

「岸上に近寄るのはやめておけ」

「どこにいるのかも知らないんだ」

「そう、それでいい。あんな男を探すのはやめておけ。おまえにはむいてない。その女だってこのだれかは知らねえが、おまえが本当に知らないことがわかれば関わり合いにもならないで済むだろう」

岸上のことは、あの女が現れるまで半ば忘れていた。もちろんそれは表面上のことではあったが、少なくとも以前の阮の忠告通り、岸上と関わらないようにしていた。

だが逆に意識しすぎて無理に考えないようにしすぎたのだろう。姿を見せないことをおかしいと思いつつも、確認することを怠った。その結果がこれだ。

調達した客のフォローをしなかったのはジラフの落ち度だった。商品を求めて来ない客にうるさくつきまとうことは、黄の廠の「仕入れ」として出来ないと言い訳していたが、調達を望んだ岸上の様子を幻滅したせいもあって、彼と距離を置いただけだ。

冷静に岸上のことを観察していれば、なにかに気づけたかもしれない。

いまになって、あの調達が別の意味を持って来るとは思わなかった。すでに済んでしまったことだが、廠のためには、ある程度の事実確認が必要だ。

だが、深く足を踏みこむべきではない。

阮の言うとおりに、岸上の行方など探さないほうがいい。あの女のいわくありげな様子を考えれば、深入りすると厄介なことになるのはわかりきっている。

それでも、岸上望んだのが調達ではなく弟の殺害なのではないかという可能性に、ジラフは

目が眩んでいた。自分でもなぜだかはわからない。肩入れという言葉に他ならない。岸上もこの廠の他の客と同じように、病的な性欲に負けただけの男だとは、どうしても思えないのだ。それより、これまでのもすべて、楊を殺すためのカムフラージュかもしれないと考えるほうが腑に落ちる。

そんなことはありえないのも、理性ではわかっていた。カムフラージュのために屍体を抱くなど、狂気の沙汰だ。

そもそもこの廠に関わる人間はなにかが狂っている。客も、商品も、そして「仕入れ」であるジラフたちもだ。なのになぜ岸上に正常さを求めているのか、自分でも理解できない。

阮はジラフの顔をうさんくさそうに睨んでから、肩を翻した。

「女のことは調べておく。他の奴らには黙っておけ。幫にバレたら殺（け）されるぞ」

「心当たり、あるのか」

「マスタング、目立つからなあ」

げっげっげつと蛙が合唱するような声で阮は笑った。

病院へと仕入れに出たジラフは、岸上の上司だった医局長と顔を合わせると、探りを入れた。

「そういえば岸上先生を最近見かけませんね」

屍骸を吟味しながら、さも世間話のように尋ねると、医局長は肩を竦める。

「ああ、彼がいないと困るな」

「いないんですか？」

「東京の病院とのフェローシップで、若手医師の交換研修に派遣されてたんだが」

「じゃあ、戻って来るんでしょう」

「いや、戻って来ないだろう」

医局長は心配そうな顔をしているが、それは岸上を慮ってのことではないようだった。ジラフは事情を飲みこめず、思わず死体を検める手を止めた。

「なんです？」

病院の正規プログラムで渡日したのであれば、あの女が知らないはずはなかった。ジラフのことを調べるくらいなら、先に病院に手を回しているだろう。それでジラフは不審に思い、なおも尋ねたのだった。

「むこうの病院から、なにも言わずにいなくなったそうさ。もともと日本人だから、入管法に触れるようなことでもない。問題には出来ないそうさ。

岸上也腕はよかったが、君の廠にはずいぶん入れこんでいたみたいだな。それにしても、なかなかこれを任せられる学生っていうのはいないんだ。岸上がいなくなったおかげで、私の手間がずいぶん増えていると思わないかね、ジラフ？」

医局長の愚痴は既に聞いていなかった。岸上は東京で行方をくらましたのだ。確かに岸上は日本人なのだし、海南灘に戻る必要はないかもしれない。だが行方がわからないというのは別の話だ。岸上は海南灘から辿ることの出来る足跡を消してしまった。阮が口にした疑いが大きく膨れ上がる。

岸上は、そもそも弟を殺すために黄の廠を利用したのではないか。そしてその罪から逃れるために日本へと逃げ出したのではないか。

ではこれまで岸上のために用意して来た屍体はなんだったのか。その屍体にむかって放たれた男の精は、なんだったのか？

香海路には最低の廠もあれば最高の廠もある。黒とか白とか色は関係ない。どちらにも格の高い廠があるし、その日暮しの男達が行けるような廠もあるのだ。海南灘ではどんな廠も法には触れないが、春をひさぐ商いはここ香海路に集まっていた。別の通りに廠を出しても罰せられるわけではないが、黒社会の後ろ盾がない廠は長続きしない。灘の清潔さをよとするウェリタス重工は、私兵を使って頻繁に人狩りをするので知られていて、この通りから外れた場所にある廠は人狩りの際の標的にされるきらいがあった。

ジラフが既に連れられて入った廠は、最底辺の部類に数えられる「白の廠」だった。娼たちのいる部屋は個別にこそなっているものの、戸はなく、壊れたブラインドが下がっていたり、ひどいときは画鋏で打ちつけた布が垂れ下がっているだけだった。その布も、なにに燻されたのか汚れきっていて、煙草の灰が飛んだのか、所々に穴が開いている。もともと、その穴から覗き見しようと、堂々と布をまくりあげて鑑賞しようと、客も娼も気にしないだろう。その廠は夢を見るために訪れるのではなく、ただ欲望を吐き出すためだけに存在していた。だれもこの廠を見栄えよくしようなどと思っていなかったし、そんなことをしたら、花代が上がって、客になっている貧しい男たちの行き場が無くなるだけだった。ほんのわずかなコインでことを済ませられる廠は、その意味で、貴重だった。部屋に押しこめられている娼たちは貧しさのあまり売られて来たり、どこかから攫われて来たりしたような女たちで、ひどいときにはだれにも言葉がわからなかった。不潔極まりない部屋で一晩に何人もの男を取らされ、栄養不良でやせ衰えた挙句、病気にかかって死んでしまう運命にある。

黄の廠では、そういう見るも無残な女の亡骸を求める客もいて、その廠は阮のテリトリーになっている。例の女の情報を仕入れた情報屋がそこにいると言われて、ジラフはついて来た。

廠は煙草と薬と汚物の匂いが入り混じり、この世ならぬ空気が沈殿している。黄の廠は屍体に春をひさがせる廠だったが、客はいずれも金持ちで、廠は清潔に保たれていた。客の好みに応じるため、遺体を冷凍することも、逆に温めて腐敗を進ませることも出来る。彼らはプライバシーを過度に保ちたがるので、部屋の壁も厚かった。

「パトリック」

廠の一番奥にある部屋にたどり着き、外れかかった仕切りの布をめくった阮は、中にいる男に呼びかけた。その部屋は通り過ぎて来たものよりは幾分かましで、座っても服が汚れない程度の調度が置いてある。

海南灘では英名（イングリッシュネーム）を用いるのが一種の流行だ。だからパトリックと呼ばれた男もアジア人だろうと思っていたのだが、パトリックは金髪碧眼の白人だった。奇妙なことに礼装で、シルクハットをかぶり、白い手袋をはめた手には杖まで握られている。この廠には似つかわしくなかった。客ではないのだろう。部屋には熾き火のように小さなライトが据えられているだけだが、そんな暗がりでも人の目を引く男だった。

「これで借りは無くなりましたね」

丁寧な口調で、パトリックは胸のポケットから写真を一枚取り出して、阮に手渡した。阮は見

もせずにそれをジラフに回す。

「こいつだろ」

写真は殆ど見えなかったが、テーブルライトに近づけて目を凝らした。先日、ジラフを尋ねて来たマスタングの女に違いなかった。

「ああ」

「名前はヴェリティ・宇（ユウ）。二十五歳です。サイエガル・アカウンティグ・フィルムの社員です」

パトリックの言葉にジラフはそれとなく首を傾げた。岸上との接点は、それだけではわからない。写真の中のヴェリティは白いスーツを着て、美しさは変わらなかったが、あの夜に見た非人間的な存在感はなかった。大して特徴のない上流階級の女というだけだった。

「父親はウェリタス重工重化学部門の責任者、宇易宗（ユウイーツォン）」

それでようやく繋がりが見えた。少なくとも父親を介して、楊との繋がりがあつた、というわけだ。

楊の失踪を怪しみ、その原因として岸上に辿り着いたのか。それとも他の繋がりがあつたのか。岸上から黄の廠に辿り着くのは容易ではないはずだ。

阮はおそらく、この男にヴェリティのことを調べるよう頼んだだけだろうから、楊亘とヴェリティの関係までははっきりしないかもしれない。

廠の商売に関わることだ。この先は、自分で調べる必要がある。

パトリックは小さなメディアを阮に手渡して、あとはそれを見るようにと言う。

阮は礼も言わず部屋を出るので、ジラフも無言のままあとを追った。これで借りは無しというのだから、二人の間で話がついているはずだ。地階へと下りて行く阮に続く。地階の壁を潜り抜けると、下水道に繋がっていた。粗末な船が置いてあつて、苦力風の痩せた男がその船の傍に立っている。その水道が、黄の廠まで続いているのをジラフも知っていた。船の上には御座をかけた商品が横たわっている。

ジラフは笑った。

「どっちがついでなんだ」

「どっちでもいいだろう」

阮は男に金を渡して權を受け取ると、大股に舟を押し水に入つた。慌ててジラフも飛び乗る。その反動で、淀んだ水が血のようにゆっくりと揺れている。みすぼらしい廠から出た後では、下水の匂いさえ気にならなかつた。

黄の廠にたどり着いた二人は商品を運びこんだが、阮は素知らぬ顔をしたままだつた。痺れを切らしたジラフは、阮を睨んだ。

「さっきのメディアを渡せよ」

「俺の貸しを使ってやったんだぜ」

「あんなところまで俺を引っ張って行って、肝心の情報を見せないなんて性格が悪いな」

「見せねえとは言ってねえだろう」

ジラフをからかうように口笛を吹きながら商品を冷凍室に運んだあと、阮はジラフをモニタ

ールームに引っ張りこんだ。端末にメディアを接触させると、データの安全性を確認し、その上でファイルを開いた。

「さて、どう手掛かりがあるかね」

阮の言葉に、ジラフは肩を竦めた。

「ウェリタス重工に関係してるんだろう」

「そんな単純な出会いとは限らないじゃないか？」

「あの男は楊のことまでは知らないんだろう？」

「その筈だが、あいつも情報が商売だから、そのあたりは知っててもおかしくない。なにしろ、楊は失踪記事が海南日報に載るくらいだ」

廠のことを考えれば、楊を調達したのは間違いだったのだろう。ヴェリティがジラフの言葉だけで諦めるとは思えない。

パトリックからの情報の閲覧を開始する。ヴェリティの生い立ちや経歴にはじまり、交友関係までこと細かく調べられていた。父親が重工幹部なのは既に聞いていたが、ヴェリティ自身、外部の会計事務所に籍を置きながらウェリタス重工のアカウントिंग部門で働いている。……つまり彼女の登場は、そう単純なものとは言えない、ということだ。

パトリックのデータはぞっとするような詳細さだ。ヴェリティはそれなりの階級にいる人間なので、情報化されているデータも多いだろう。しかしこの分なら、岸上がこの廠の客であることはおろか、担当がジラフであることも、わかる人間にはすぐわかるのかもしれない。

データの中には楊亘の名前ももちろん見られたが、予想もしなかったことに、岸上の名前も出て来た。

楊亘については、二年前にウェリタス重工の若手サークルで知り合い、何度か食事に行っている。交際している、とまでは言えないようだった。

岸上の名前は楊よりも少し前に出て来ている。四年前、ヴェリティは海南灘西端にある燕橋（ヤンキャオ）空港でのテロ事件に巻きこまれ、大怪我を負っている。一緒にいた兄は死亡したということだから、かなりの大怪我だったのだろう。岸上はまだ学生だったが、補佐として治療に関わっていた。海南灘の大きな病院は数があるわけではないから、偶然のことかもしれない。しかし、ヴェリティは楊よりも岸上と先に出会っているのだった。

少しばかり推測の言葉を交わしたあと、阮は喉を鳴らすようにして笑った。

「陰謀説がまたひとつ深まったな」

「ああ」

ジラフはやはり、心なしか安堵していた。岸上に廠を利用されたことは由々しき事態なのだが、ジラフにはそこまで考えられない。単に、彼に殺人の動機があるように見えて来たことを喜んでいた。人殺しとネクロフィリアでは、人殺しの方がはるかにましなものだからだった。

ずっと、岸上はそんな趣味を持った人間には見えなかった。その勘は正しかったんだという考えに、ジラフは傾きかけていた。

「俺はどうすればいいと思う？」

そう訊くと、阮は顔をしかめた。

「ヴェリティ・宇がどうして岸上を探すのかはわからない。あいつが楊亘を殺したと気づいているとは限らない」

楊亘の亡骸は、とっくにミンチになって東シナ海に沈んでいる。死体がないので、彼が殺されたことはもはやだれにも立証できない。しかし殺されたかもしれないと思っている人間が多いだろう。失踪する理由は彼にないだろうから。

阮は煙草を取りだして火をつけた。

「まあ、楊亘の兄貴を探してみたら失踪していた、じゃあ怪しいと思うのも当たり前だろうが」

「それもそうだな」

「しばらく仕事は休め。お嬢さんも、俺たちが屍体を扱っていることくらいわかっているだろうからな」

「……なにもするな、ってことか？」

「だからって東京になんか行くなよ」

岸上を追う、という意味だった。ジラフは思わずかっと思昂した。手を伸ばし、阮の胸倉を掴みあげる。

「しつこいぞ！」

「落ち着けよ。忠告してるんだ」

「こんな女が出てこなければ岸上のことなんか忘れてた」

「わかった、わかった」

いなされ、ジラフは大きく息を吐いて手を離した。阮は慌てたように煙草の灰を落とす。

「ち、あちち……」

手の甲に落ちた灰を慌てて振り落している姿を見て、ざまあみろ、と口の中でつぶやいた。

それから数日の間、ジラフは自分の寓（アパート）でなにをすることもなく過ごしていた。ヴェリティに関わるようなことはなかったし、ましてや岸上の情報も入って来なかった。することがあまりにもなく、腐りそうだった。

何日か目に阮がやって来て、ジラフに紹介状を渡した。

「まっとうに稼ぐ仕事もやってみろよ」

「……仕入れをやめろ、ってことか？」

知らない人間の名前で書かれた紹介状だった。ジラフが持参すべき履歴書も用意されている。すべてを準備されていた。困惑気味に阮を睨む。

「俺の立場はそんなにやばいってことなのかよ」

「そういうわけじゃねえ。ただ、おまえだっぴつと仕入れで生きていたくはねえだろ。あんな変態どものケツの世話なんかよ」

確かに、好きな仕事ではなかった。だが、ジラフは客たちが満足する相手をあてがえばいいわけだから、自分の身体で稼ぐわけでもない分、嫌なものでもなかった。見たくないものには目を塞げる。

けれども、阮が義侠心だけでここまでしてくれるとも思えない。おそらく、ジラフのミスは致命的なものではなかったものの、廠に大きな危機感を与えたのだ。白や黒と違って、黄の廠は存在自体を公に出来ない廠なのだ。いかに取り締まる法のない海南灘とはいえ、ときに欲望を満たすために殺人すらしているのだから。

ジラフもそれを承知していた。次にミスをしたら、幫に殺される。その前に「仕入れ」をやめさせようということなのだろう。

「なんなんだ」

紹介状の宛先には海南省役所の公共衛生課長の名前が書かれている。まさか市役所で働けということではないだろう。

「六城路（リュウシンルー）の南端にある療養所だよ」

六城路は海南灘を南北に貫く道路だ。その南端ということは、海南灘の最南端にあるということになる。ジラフの寓からは車でも三時間近くかかる。

「なんでそんなところに」

「療養所といっても上層階級のクラブハウスみたいなものだ。そういうところに動かせる人間が一人いると、幫も色々都合がいい」

刑務所代わりのサナトリウムに監禁されるようなものだった。だがここで頷かないと、どうなるか知れたものじゃない。身を隠すのにもちょうどいい、ということなのだろう。阮の目は有無を言わせぬものだった。おまえがこんなに莫迦だったとは思わなかった、とでも言いたげだ。

納得はいかなかったが、従う他になかった。

介助士というのがジラフの療養所での身分だったが、実際のところ、行われている（らしい）医療行為には関わったことはなかった。ジラフの役目は黄の廠にいた頃と似ている。入院患者たちの御用聞きだ。既はここをクラブハウスみたいなものだと言ったが、その通りで、実際の病人など殆どいないのだった。三人の医師が交代で常駐しているが、ジラフよりも閑をもてあましているように見える。心臓外科手術も行えるという手術室があるが、医者が看護師を連れこむの以外に使われているのを、見たことがなかった。まっとうに稼ぐ仕事と言われて来た場所だが、到底まっとうな仕事場には思えない。

ジラフ自身の部屋もこのサナトリウムの中にある。職員と患者のエリアは分けられていたが、むしろ使用人と主人の関係に似ていた。青い制服で日々を過ごしていると、まさしく囚人ではないかという気がして来る。建物の清潔さは黄の廠に似ていたが、毎日のように香海路の猥雑さが恋しくなった。

患者たちは、娯楽を求めている。ジラフは言われるままに、彼らが求めるものを手配した。女を抱きたい、と言われれば外に連絡を取って調達した。していることは黄の廠と変わらない。あいかわらずジラフは笑って患者たちにこう言う。

「知道了（わかりました）、先生（シーサン）」

時折、ウェリタス重工の社員も患者に混じっていた。けれどももちろん、あの女の噂さえ耳にしなかった。

こうして閉じこめられている間に、ヴェリティは岸上の行方を掴んでいるのだろうか。それとも、楊亘が殺されたことを知って、黄の廠を訪れるだろうか？ 既と連絡を取ることは出来るが、今更彼に聞くことも出来ない。聞いたら最後、（いつまで続くことになっているのかは知らないが）島流しの期間が延びるだけだろう。

患者の滞在期間は様々だった。一週間でいなくなる者もあれば、数ヶ月滞在していく患者もいる。職員のオフィスに貼りつけられた各患者の滞在スケジュールは複雑煩瑣を極め、はじめはその見方さえわからなかった。

その日、スケジュールを覗きこむと新しい線が加わっていた。半年の長期滞在だ。患者を表す記号の隣には、通常、三人の医師のうちのどれかが担当として書かれているのだが、その患者のものには「同伴」と書いてあるばかりだった。はじめて見る記述だったが、主治医がついて来るという意味だろうと踏んだ。

患者の受入はジラフの仕事ではない。あとから挨拶に回る必要があるなど部屋番号を頭に叩きこんでから、届いた荷物を確かめるために倉庫へと回る。前日に外部へ依頼した物品は、たいがいは朝までに運びこまれる手筈になっているのだった。確かめた荷物を台車に乗せ、エレベーターで上がる。一部屋ずつ、頼まれたものを渡していった。それらの料金は入院費用に加算されるわけだが、ジラフに小遣い程度の額を渡して来る患者も多く、けっこうな副収入になっていた。

ジラフは自分の身体を求められたとき以外は「不是（いいえ）」と言わなかった。偏屈な客ばかりを相手にしていた黄の廠でのことを思えば、どれも大した要求ではなかった。

午後になって職員のエリアへ戻り、昼食を取る。

居合わせた看護師が新しい患者の話をしていて、日本人の俳優らしい。

「スケジュールの『同伴』ってどういう意味なんだ」

尋ねると、思った通りの返事があった。

「主治医がついて来るのよ。こっちのドクターは必要ないってこと」

「なんのために入院するんだか」

「さあ。一週間くらいならなんかトラブルでも起こしたんでしょうけど、半年となると、本当に悪いのかもね」

看護師の言葉を聞きながら、なんのためにこんなところにいるんだか、とジラフは自嘲した。

「話しやすそうだった？」

「中国語は話せないみたい。主治医が通訳してた」

「ふうん」

それなら楽だな、とジラフは思う。言葉が不便なら遠慮もするだろう。

看護師はジラフの前でぺちゃくちゃと新しい患者にかかわるようできて結局は自分の話でしかないことを喋り続ける。半分は聞き流しつつ、適当に相槌をついた。

「ジラフ」

と、不意にその名前を呼ばれ、ジラフはぞっとして振りかえる。療養所では、もちろん通り名では呼ばれていない。その上、声に聞きおぼえがあった。まさか、と思いつつも、心当たりは一人しかいない。そしてやはり、そこには岸上がいた。

さすがに岸上も困惑しているようだ。お互い、こんな場所で会うような相手ではないと思っているのだ。岸上は目を見開いて、ジラフを頭の上から足元まで見渡した。ジラフの青い制服を見れば、彼がここの職員であることは明らかだろう。岸上のほうは、黒いスラックスに、グレーのスタンドカラーのシャツを着ている。彼はそれから、唇に笑みを浮かべた。

その顔の奇妙さが、ややひっかかる。しかしそれよりも、岸上がいまここにいるということがジラフを動揺させていた。

「やっぱり、ジラフか。こんなところで会うとはな」

ジラフは絶句したまま動けなかったが、看護師がジラフという名前を聞きとがめたのに気がついて身体を動かした。

「……先生にもう一度会えるとは思わなかったですね」

どうするべきか、なぜ岸上がここにいるのか、必死で推理しようとする。けれども納得のいく説明が出来るはずがない。日本で姿を消した岸上が、なぜいまさら、海南灘にあらわれるのか。ヴェリティは岸上がここにいることを知っているのか。そしてなぜ、こんな場所に現れたのか。

それとも、この再会は偶然ではないのだろうか。岸上はジラフがここにいることを知ってやって来たとしても言うのか。見たところ岸上の驚きは本物に見える。ジラフは香海路で「仕入れ」をするような人間で、まっとうな育ちではなかったし、（やや疑わしいが）まっとうな職場であるこの療養所にいるなど予想もしなかつただろう。

今日来た患者の同伴医師というのは岸上のことに違いない。

そう判断すると、ジラフは腹を決めた。立ちあがって、岸上にむかってにこやかに笑う。いつでも客に見せる笑顔だ。

「本当に久しぶりですね」

そう言いながら軽く岸上の手を取り、自然と食堂を離れる。岸上を見上げつつ、小さく告げた。

「ジラフっていうのはあっちでの通り名なんです。ここではこれで呼んでください」

ジラフは胸につけたIDカードを示した。

「本名か？」

「さあ」

岸上に以前と変わった様子はない。弟を殺した罪から逃げ回っているようには見えなかった。死体を卸すときも、屍体を抱きに来るときも、岸上はいつもこうだった。淡々と、顔色を変えない。岸上が興奮した姿を見せたのは弟を相手にしたときだけだった。ということは、やはりあの夜は特別だったのだろうか。

(……弟を殺すことが目的だったから？ っていうのは、結論を急ぎすぎか)

ジラフは職員用のテラスまで岸上を連れ出し、彼を見上げた。

「どうしてこんなところにいるんです」

「それは俺が聞きたいことだ」

「見ての通り、真面目に働いてるんですよ」

「黄でも君は真面目だったと思うがな。ふうん、そうか。転職、ね。」

俺は今日来た患者について来たんだ。しばらくここにいる」

やはり、噂をしていた日本人の主治医が岸上らしい。あの予定の通りだとすると、半年はここにいることになる。ジラフはそのことに気がつくのと、どっと不安が大きくなったのを感じた。

しかしそれが、なにを不安に思っているのか判然としない。

「医局長から、先生は東京で行方不明になったって聞きましたよ」

「俺がついてるあの患者は、俺の父親なんだよ。東京で捕まった」

「それで行方不明になったんですか？ おかしいじゃないですか」

岸上の言いようは理由になっていない。からかうように咎めると、嫌な顔をするかと思った岸上は、またも笑った。却ってこちらが不愉快な気分になる。

「聞きたいのか」

岸上に問いただきたい疑問は山のようにある。聞きたいのはやまやまだったが、近寄るべきではないのかもしれない。幫のこと、廠のことを思えば近寄らずにいるべきだ。

あるいは、既に岸上が現れたことを報せたほうがいいのか。

(いや、それもおかしいよな。阮は別に岸上と関わりがあるわけじゃない。ただ、俺が深入りするべきじゃないと言って来ただけだ。ヴェリティ？ そいつは俺に関係のない女だろう。岸上がなにを目的に弟を殺したのかなんて俺には関係ない。俺は客がほしいものを調達しただけだ。楊の死体はもうこの世に存在してない。なにもかも、なにもかもすべてが俺には関係がないじゃないか)

それに、なんでもかんでも既に縋るのは餓鬼っぽいだろう。この療養所に追いやられたことに関して、ジラフは既に腹を立てていた。それこそ教えてやる義理はない。

ジラフはなにかを含んだような岸上の視線をするりと交わして、岸上に背中をむけた。岸上もジラフとは関係がない。それだけだ。

「俺はここで介助士をしています。名ばかりのなんでも屋ですけどね。さすがにここじゃネクロは無理ですけど、なにかあったら言ってください。なんでも用意しますよ」

ジラフはそう言って笑うと、岸上から離れた。

岸上とは関わらないように努めていたが、狭い所内で、半年も滞在するのでは疎遠にするのにも限界がある。

岸上の父親は肺癌手術を日本で終えたあとの療養としてここへ来ていた。右肺のすべてを切除していたから、無理はきかない。主治医という名前ではあるが、岸上にはすることもさしてないようだった。

一ヶ月もすると、岸上が行方不明にならざるを得なかった事情はわかってしまった。彼の父親は、海南灘へ出奔してしまった息子のことを探し続けていたらしい。岸上が日本に帰っているということを知って、息子の居所がわかるやいなや、強引にそこから連れ出してしまったようだ。父親に拘束され、岸上は海南灘に帰れなくなった。とはいえ本人は病身で、岸上は枕元でぼんやりする他に親孝行も出来ない。

「親父に恨みがあるわけじゃないし、会いたいなら会うのはやぶさかじゃない。けどすることもなくただ侍っているというのは無理があると思わないか」

そう言いつつも、岸上は以前よりずっと顔色がよかった。大学病院にいるときは、若い医師には当然のことで、夜勤と手術に追われ、寝ていない真っ青な顔で死体を渡しに来ることも珍しくなかった。いまは睡眠時間だけは十分なほど取れているのだろう。

「先生が手術したんじゃないんですか」

「俺に手術が出来るってことに気が回るような男なら、俺だって行方不明にならずに済んださ」

ジラフは胡乱になりそうになる視線を、目がかゆいそぶりで誤魔化した。岸上が口にする話がどこまで真実なのか、わからない。まったくの嘘ではないだろうが、そもそも岸上がジラフに本当のことを話すとは思えなかった。弟を殺したのは、欲望のためでなくなにか他の理由があるというのであれば、なおさら、この男はジラフに嘘をつくはずだ。

「外科医の息子が傍について、黙って見てただけですか」

「執刀は見なかった。手を出したくなるだろう」

岸上は打ち解けた様子で笑う。その表情が、ジラフには不思議だ。死体を回すときの岸上はあくまでもビジネスライクだったし、自分が依頼して来るときは欲望を完全に押し殺していた。こんな風に笑いかけて来るような関係ではなかった。知人もいない環境だから親しげにして来るのか、ジラフが相手だから笑うのか。なにかの意図が巧妙に隠されているのか、それともそうでないのか。この会話は腹の探りあいなのか、そうでないのか。岸上と話すと、どっと疲れを感じた。

そんな毎日が続くとなにもかもがどうでもよくなって来る。

この療養所に幫の人間がいれば便利だ、などと言われて来たものの、幫からの指示らしきものを受け取ったこともなかった。患者の頼みを聞くために外部との連絡は取っていたが、数ヶ月、この療養所から出ていない。

ジラフがここにいなければいけないのは、状況が落ち着くまでの隔離でさえないのではないかとジラフは危ぶんでいた。

患者たちは好きに出て行くことができるが、職員は出て行くことが出来ない。おかしい話だ。岸上には警戒をしていた、と思う。けれども、投げやりな気分で日々を過ごしていると、岸上に対する警戒とやらもどうでもよくなって来る。岸上が親しげにふるまうのであればなおさらだ。屍体を抱くような相手と話を通じるとは思っていなかったのだが、それがただのカムフラージュなのであれば、岸上は話を通じる相手のはずだ。

岸上も、父親に拘束されていることへの不満を持っていた。その不満が、閉じこめられているジラフのものと同通っていた。

愚痴を言い合っていると、岸上と共通の話題が出来ている。そのことに、ジラフの胸はざわついた。その感覚には憶えがある。岸上が調達を依頼して来たときにも感じた。それから、ヴェリティが岸上のことを尋ねて来たときにも。

いまさらだが、その感覚にジラフは焦った。岸上に対して、冷静な判断が下せなくなっている。それはわかるのに、岸上の存在を突き放すことが出来ない。思い返せばはじめからだった。ジラフははじめから、岸上が屍体愛好者であることに半信半疑でいた。出会ったときからジラフは、岸上という男に対して冷静になれていなかったのだ。

既に色々と言われて苛立った理由も、こうなれば明らかだ。

ジラフは投げやりになっていた。この療養所に閉じこめられている限り、自由がない。閉鎖されたサナトリウムでは選択肢がわずかしかなく、もともと惹かれていた岸上がいるというのに、他の選択をするはずがなかった。

(もうどうでもいい)

積極的に流されることにしたジラフは、岸上を手術室に連れこんだ。岸上は拒まなかった。手術台の上に横たえられたとき、ジラフの脳裏に廠のことが浮かんできた。台の上で物も言わずに横たわり、犯されるときを待っている骸を。

わずかに不快感がせりあがって来たが、身じろぎしたときにはもう、岸上の手はジラフの肩を抑えこみ、唇が重なっていた。

岸上は一度頭をあげ、ジラフの顔を覗きこんだ。そこにはかつての黄の廠で見せていた冷静さも、無感動さもなく、岸上は貪欲な笑みを浮かべてジラフを見下ろした。

「そんなに退屈しているのか？」

ジラフは岸上への好意を自堕落さで覆い隠すように、殊更、香海路の「仕入れ」みたいな口調で言った。

「先生だって退屈でしょう」

「ああ、退屈だね」

そう返事をすると、岸上はジラフの服の下へと手を伸ばした。

何回か行為を重ねるうちに、ジラフの投げやりさはますますひどくなった。完全に岸上と馴れ合い、ずるずると行為に溺れる。なにも考えず、快樂だけで頭をいっぱいにしても人間は生きていけるのだった。

いつもジラフから求める。仕事を放り出して岸上の部屋に逃げこむこともあった。ここの患者たちは、実際のところ、ジラフがいてもいなくても構わないのだ。わがままを聞いてくれる奴隷は他にもいる。

岸上はジラフを拒まなかった。お互いの身体を貪りあいながら笑って、そのまま眠ることも幾度もあった。

岸上を警戒しなければという気持ちは、岸上に抱かれるたびにあきらかに目減りして、いまはもうない。

「どうしてこんなところで働いているんだ」

そう聞かれたのは、くたびれきって毛布に包まっていたときだった。岸上は部屋着姿で椅子に座っている。ジラフはとろんとした目を岸上にむけた。

「唐突に」

「黄の廠の仕入れが公立サナトリウムの介助士に転身なんて、不自然すぎる」

「おまけに俺は仕事をしてないんだからな」

「そうなのか。君が来るのは入所者へのサービスなんだとばかり思ってた」

岸上はそう言って笑う。莫迦を言え、とジラフは思ったが、口にはしなかった。寝返りを打って、仰向けに横たわる。毛布を引きあげて天井を見凝めながら、別のことを聞いた。

「先生、ヴェリティ・宇って女、知ってる？」

空気が強張るのがわかった。なにもかもどうでもいいと思ってジラフはそんなことまで口にしてしまったのだが、張り詰めた空気を感じて、言うべきではないことだったのかとたじろぐ。岸上はヴェリティを知っているのだった。

たぶん、四年前の患者としてじゃない。

「その女が、なんだ」

「知ってるのか？」

身を起こして岸上を振りかえる。岸上の目には冷たい無感動が見えただけだ。

「ああ、知ってる。俺の患者だった」

「俺のところに訪ねて来たんだよ。あんたがどこにいるのか教えろと言った」

「教えたのか？」

「どうして俺があんたの居所を知ってるんだ」

ジラフがそっけなく返すと、さすがに岸上も怪訝な顔をした。

「……いつの話なんだ？」

「ここに来る前だ。というよりも、それがあったせいで俺はこんなところに飛ばされたんだ。あんたのせいだよ、あんたの」

そう吐き捨て、もう一度毛布をかぶりなおすと、目を閉じる。岸上の身体の重みを感じて目を開けると、彼は薄ら笑いを浮かべてジラフを見ていた。

「なんだよ」

「こんなところで君に会えるなんて思ってなかった。ましてや俺のところに転がりこむなんて」

「退屈なんだ、そう言わなかったか？」

岸上は喉の奥で笑い、口づけて来る。首の後ろにちり、と痒みを感じる。岸上の身体の重さだけでなく重みが、胸にのしかかって来る。しかしその感覚に気がつかない振りをして、ジラフは岸上に応えた。

「君が退屈だからだって構わないさ。俺は嬉しいね」

嬉しいと言われて、じわりと体温が上がるのがわかった。流されているという言い訳がきかなくなりつつあるということだ。ジラフは険しい顔で、岸上を睨みつける。

「嬉しい？」

「前の関係じゃこうは行かないだろう」

「.....ヴェリティはどうしてあんたを探しに来たんだ」

岸上は一向に答えなかった。ただ口づける合間に、こう言った。

「彼女のおかげで君がここに来たというのなら、感謝してもいいな」

ヴェリティは楊の死を追いかけ、その兄と病院と黄の廠を知り、ジラフにたどり着いたのだと思っていた。けれどもジラフは、他にもヴェリティがあの日ジラフを訪ねて来る可能性があることに気がついた。

ヴェリティは、楊よりも先に岸上のことを知っていた。だから楊に近づいたのではないか。彼女はウェリタス重工で働いていたから楊と出会ったのではなく、楊に出会うために、父親のコネクションを使い、ウェリタス重工に入りこんだのではないか。

頭の奥でチリチリと焦げ臭いにおいがする。

なにか見えたような気もしたが、重要なデータが欠けている。ここにいてもわからないが、療養所に閉じこめられていては探しにいけない。

パトリックのディスクは既のもとに残して来ていた。あれを見れば、まだなにかがわかるかもしれない。しかし、いまさら既にディスクを要求するのは気がひけた。なぜほしいのか尋ねられるだろう。岸上と同じ療養所にいることを伝えたくなかった。

岸上が口を割るとは思えなかったし、言ったとしても、真実であるはずがない。なにも見えない不透明な袋の中に押しこめられた気分だった。やはりなにも考えるべきではないのだろうか。なにも考えずに、岸上に抱かれて眠ればいいとでもいうのだろうか。

それが一番楽だ。ヴェリティのことも、幫のことも、岸上のことさえ考えず、快樂の中にたゆたっていればいい。

どうなろうと構うものかとそのときも投げやりに思った。

油断していたのはジラフ一人でもなかった。

岸上はジラフのように出て行く自由がないわけではないのだが、心理的にこの療養所に繋ぎとめられているようだった。父親の療養が終わった後はどうするのかと訊くと、楽しくもなさそう

に「日本に帰るんじゃないのか」と言い捨てた。

それからにやりと笑い、ジラフを見た。

「君はいつまでここにいるんだ」

「さあ、知らない。刑期は教えてもらってない」

既にせよ幫にせよ、ここにジラフを置いておく目論見はあるのだろうか。なにか都合のよい使い方が見つかるまで、このままだろう。裏を返せば、明日にも呼び出される可能性があった。使い方といっても、たぶんなにかの犯人として灘沖に浮かぶことくらいなのだろうが。

岸上と同じベッドで眠るのが心地いいのは、彼に惹かれているからという理由だけではなく、この外の世界に誠意などかけらもなくなってしまったお互いを責めないからなのだろう。香海路の下を流れるどろどろとした下水の中に沈んでゆくような、異常な快適さがジラフを捕らえていた。

なにも考えたくない。……けれども振りかえれば、廠にいたときもなにかを考えていたわけではなかった。なにも変わりはないのだった。なにかを考えるような人間は黄の廠で「仕入れ」などしない。客たちとジラフの間にある溝は深いようでいて、跨ぐのはたやすいほど、狭いものでしかないのだった。

朦朧とした意識の中で、ジラフは奇妙な感覚を味わっていた。身体を動かしたいのに動かせない。わずかに目を開けると、やけに部屋が眩しい。その視界がふと翳り、岸上が覗きこんでいることに気がついた。笑っている。なんだかわからなかった。岸上の顔に手を伸ばそうとしたが、やはり腕は動かない。夢うつつの境にいるのか、それとも夢を見ているのか、わからない。ただ、岸上の呟く声だけがはっきりと聞こえた。

「まだ意識があるのか」

岸上の言葉に、焦げつくような焦燥を感じた。ジラフは何度か果たした調達のことを思い出す。特に一番最近の、楊のことを。あのとき、楊亘はわずかに薬物から意識を取り戻して、ジラフを見て口を開いたのだった。

文句を言おうとしたが、喉からはかすれた音が漏れるだけだ。あきらかにおかしかった。もがこうとして、簡単に岸上に抑えこまれる。殆ど動けなかったが、掴まれた腕で岸上の手のひらの温度を感じた。妙に熱く、汗ばんだてのひらだった。

なにが起きているのか把握しないうちに身体を抱え上げられた。どこかに連れて行くのだろう。岸上の腕の中で気を失いかけたが、混濁した意識の中に強烈な苦痛が襲いかかって、ジラフは悲鳴をあげた。

それはやはり声にならない。

身体中を刺すような痛みが覆っている。冷たい。体中にあたる氷の塊で、氷水を張ったバスタブに落とされたのがわかった。だがジラフは意識も確かでなかったし、苦痛にパニックを起こしていた。なにがなんだかわからない。浮かびあがろうとすると、岸上の手が強く抑えこむ。背骨を強く引き絞られるような痛みと、体中の血が凍るような恐怖で必死でもがいた。

どれくらい氷水に晒されていたのかはわからない。バスタブから引きずり出されて床に押し倒され、そのまま犯された。冷水で身体の内外部も凍えていた。あまりの冷たさに身体のすべてが軋みを上げる。犯されたこと自体にはなにも感じなかった。そんなことよりもその状況すべてが苦痛だった。タイル張りの床は、冷え切った身体には生ぬるかったが、固く、ジラフを拒絶した。岸上は力任せにジラフの身体をこじ開け、薬のせいでわずかな抵抗も出来なかった。どのあたりで本当に気を失ったのかも知らない。

恐怖の裏で猛烈な怒りを感じていた。おまえが死ねばいいんだ、ジラフは胸の奥でそう叫んだ。屍体とファックするのがそんなに好きなら、おまえが死ねばいいんだ、と。身体がままならないことにも怒りを覚えたし、岸上の顔が笑っているのにも本当に腹が立った。何度か岸上はまともだと信じようとして、ジラフは自分を欺いて来た。けれど結局は岸上も黄の廠に来る他の客と変わらないのだ。

(こいつはおかしいんだ、魂まで腐ってるんだ、俺にこんなことをしやがって！)

しかしその怒りも、思考も、もつれあい絡みあって形にはならない。次には猛烈な寒気に身を震わせて、ジラフは意識を取り戻した。

布団にぐるぐる巻きにされて、横たわっていた。何枚も毛布が使われている。手も足も毛布の

下で、身動きが取れない。すぐ傍に人の気配がある。その毛布の上から、抱きしめられる格好になっているようだった。

意識はぼんやりとしたままで、ジラフは目だけを動かして、天井を眺める。ジラフの部屋だった。

(どうしたんだっけ)

おぼつかない記憶でなんとかいまの状況を説明しようとしても、しばらくのあいだはなにもわからなかった。

ひどく暑くて、喉が渇いている。それなのにぞくぞくと悪寒が身裡を駆け抜ける。ひどい熱が出ているのだ。ぶるっとジラフが身体を震わせると、それが背後の岸上に伝わったようだった。

「目が覚めたか？」

その言葉で、混濁した記憶のすべてが凝縮して、ジラフの怒りは瞬時に沸騰した。

岸上はジラフに薬を盛って、その上で氷水のバスタブに浸け、おそらくは屍体がわりに抱いたのだ。

ジラフがもがくと、岸上は手を離れた。何枚も重なった毛布から逃れて、ふらふらの身体で起きあがる。途端に吐き気と、めまいを起こしたが、心配げに見て来る岸上を睨みつける。それからこぶしを握りしめて、岸上を撲りつけた。当たり前だが力が入らず、岸上はよけなくても痛くなかったはずだ。

「ふざけるな！」

「40度まで熱が出てる。安静にしてろ」

「おまえのせいだろうが！」

もう一度撲りつけると、やや痛かった様子だったが、そのまま手を取られてベッドに横たえられた。また入念に毛布で包まれる。ジラフももう、それ以上動く元気はなかった。

岸上はジラフを見下ろし、吐き捨てた。

「おまえは知ってたはずだろう」

なにが、と問うことも出来なかった。ジラフは確かに知っていた。岸上は屍体愛好者（ネクロフィリア）だ。生きている人間と愛を交わすよりも、屍体と繋がることに喜びを見出すような男なのだ。そのために実の弟を殺した。弟を殺したかったわけじゃない。弟と愛し合うのにそうでなければ出来なかったからだ。

それを認めて来なかったのはジラフだった。

「俺がこういう人間だと知っていて、傍にすり寄って来たのはおまえだ、ジラフ」

「おまえなんか死ねばいいんだ」

「亘（わたる）もそう思っただろうな」

そう言って岸上は嗤う。それからベッドを離れると、じきに、濡らしたタオルを手にして戻って来た。ジラフの額にタオルを置く。

「解熱剤はもう飲んでる。三日も安静にしてれば治るさ」

その後は、岸上の欲望を満たすために、また時々意識混濁になれとでも言うのだろうか。熱が下がったらすぐに既に連絡を取ろうとジラフは心に決めた。岸上がいると言えば、せめてここか

ら出してくれるだろう。岸上に関わるな、と言ったのは既なのだから。

既がどういうつもりで岸上に近づくなと言ったのかはわからないが、こんなことを見越していたのだろうか。

(そういうわけじゃないか……岸上もただの客だって、わかってただけだったんだろう)

岸上の看病はひどく誠意のこもったものだった。ただそれは、けっして自分のせいで肺炎を起こしかけているジラフに対して謝意があったからではない。ただ、目の前に病人がいて、それが岸上にとって親しい人間だったから手を伸ばしているだけだ。彼は医者だ。

丸一日経っても、岸上から謝罪の言葉は聞けなかった。

熱に浮かされながらジラフは眠り続けた。気がつくと時折、岸上は彼の上にかがみこみ、口づけていることがあった。この異常さが岸上の他人を愛するやり方なのだろうが、そんなものは理解したくない。今回は氷水に突き落とされた程度で済んだが、そのうち殺されてもおかしくなかった。

チェストの上に置かれたジラフのハンディに、着信があった。傍に座っていた岸上は手を伸ばして取ると、ジラフに手渡しす。ハンディが冷たく感じられる。

知らない番号からの着信だった。出るかどうか迷ったが、帮の人間なら早く連れ出してくれと言おうと思い、応答した。

「ハイ」

『ハイ、ジラフ。前に私が尋ねたこと、覚えているかしら』

知らない女の声だった。けれど、すぐに気がつく。ヴェリティだ。ジラフの様子がおかしいことに岸上も気がついたようだったが、ちらりとジラフを一瞥しただけで、なにもしなかった。自分には関わりのないことだと思っているのかもしれない。

『私はまだ探しているのよ、楊の兄の行方を。ジラフ、もう一度訊くわ。彼がどこにいるのか、あなたは知っているんでしょ』

ヴェリティが見透かしたように告げる。なにをどこまでヴェリティが知っているのかジラフにはわからなかった。確信して彼女が言っているのか、それともただかまをかけているだけなのか。

。だいたいなぜ彼女は、ジラフと岸上のあいだになにかあると思ったのだろう。ジラフの客は岸上だけではなく、面識もない彼女が、ジラフの言葉に出来ない感情を知っているはずもないのに。

。ジラフはとっさに岸上を見る。その視線で、さすがに岸上は腰を上げた。ジラフはなにかを考えようとしたが、熱のせいで億劫だった。そのままハンディを岸上に差し出す。触れた岸上の手は、ハンディと同じくらいに冷え切っていた。

ヴェリティがなにを囁いたのかは知らない。岸上はなにも言わず、表情さえ動かさずにハンディを切った。

ジラフのハンディをベッドの上に放り投げ、岸上は踵を返す。ジラフはその背中に怒鳴りつけた。

「待てよ！」

「……なんだ？」

「あの女はどうしてあんたを探してるんだ」

「聞きたいのか？」

岸上はわずかに焦った様子で、ジラフを見た。

「聞きたいのか」

もう一度問われて、ジラフは頷いた。岸上は立ち尽くしたまま、やや沈鬱な面持ちで口を開く。

「俺がヴェリティに会ったのは四年前だ」

「燕橋（ヤンキャオ）空港のテロだろう」

「調べたのか」

「不審な女に問いただされれば、調べたくもなる」

岸上は淡々としたまま、早口に始めた。

「ヴェリティは彼女の兄と一緒にうちの病院に担ぎこまれて来た。右足がズタズタだったが、命に別状がなかった。兄のほうは首の動脈を切断していてほぼ即死。ヴェリティは応急処置をしたあと、治療は後回しだったから、病室で死んだ兄貴と並んで横たわっていたよ。あの日は山ほど怪我人が担ぎこまれていたからな——俺はまだ医学生で、大したことも出来なかったが、毎日こき使われていたし、その日は一瞬も休む暇がなかった。多分それでおかしくなっていたんだろう。気づいたとき、俺は死んだ彼女の兄貴の上に乗かってたんだ。どうしてそんなことをしようと思ったのか、いまも憶えていない。ヴェリティはそれを見ていた。意識が朦朧としていたから、はじめは理解できなかつただろうが、彼女は見てたんだ」

そう言ってから岸上は自嘲した。

「わかったろう、いい加減」

「……ヴェリティの他にはばれなかったのか」

「ばれないはずがないだろうが。医局長が俺を仕入れに協力させたのはなんでだと思う。俺がそういう人間だと知ってたからだよ。病院では二度とするなと言われていた。けれどな、それは病院での話なんだ。相手が欲しいのなら黄の廠に行けと言われてた。ジラフ、おまえは俺が仕入れを手伝うようになってこんなことをし始めたと思っていたんだらう？ そうじゃない。黄の廠ではじめて屍体を抱いたんじゃない」

岸上はそう言うと部屋を出て行った。ジラフはもう一度呼び止めたが、岸上は振りかえらなかつた。

岸上の話を聞いてなにを感じればいいのかわからなかつた。怒りも悲しみも悔しさもわからなかつた。岸上の話をどうでもいいとは思わないのに、理解できなかつた。わかるのは、もう目を覚まして岸上の姿を見ることはないだろうということだけだ。

失望も安堵もなかつた。

ジラフにはただ理解が出来なかつた。岸上がなにを感じ、なにを求めていたのか。だからなにも感じられない。怒りもない、悲しみもない。ぼんやりと天井を見上げながら、やがてまた眠りに落ちた。

肩を揺さぶられて、ジラフは目を覚ました。

「おい、起きろよ」

目を開けて見えたのは、久しぶりの顔だった。阮は眉をひそめて、熱でぼんやりとしたジラフを見凝めている。また前後がわからなくなるが、移動したわけではないようだ。部屋は、療養所のスタッフエリアにあるジラフの部屋に間違いない。

もちろん、岸上の姿はなく、どうしていきなり阮がここにいるのか考えようとしたが、うまくまとまらない。

「大丈夫なのか。高熱出したんだと？」

「なんでこんなところにあんたがいるんだよ」

拒む口調でそう問いかけると、ああ、と阮は浮かない顔で息を吐いた。

「どうして岸上がいるってことを報せなかったんだ」

「報せてどうなるものでもないだろ」

「そんなわけがあるか。おまえ、あいつがいまどういう立場にあるかわかってないのか？」

「知るわけないだろう」

ジラフがいままでの恨みをこめて吐き捨てる。阮はがりがりした後頭部を搔きあげて、軽く舌打ちして座りなおした。ジラフはのろのろと起きあがり、冷たく阮を睨む。阮はさほど動じた様子もないが、苦い顔をしていた。

「まあ、そりゃそうか」

「岸上は」

「ここからは抜け出したらしいな」

「それで、あいつの立場がなんだって？」

「ウェリタス重工が、楊亘が失踪したことについて、はっきりさせろと幫に迫って来た。黄の廠がその原因だっていうこともわかっているみたいだな。対応次第じゃ廠を潰すと通達して来た。いまの香海路は、重工の私兵と明幫の紅棍（ホングァン）が、一触即発の状態でにらみ合っているが、香海路に重工兵を入れたら、その後始末はとんでもないことになる。黄の廠だけの問題じゃなくなるからな。

だから幫はいま、重工側に条件を提示している。楊亘はもう死んでいるから出せない。かわりに重工に渡すことができるのは岸上の身柄だけだ」

ウェリタス重工の要求はあきらかにおかしい。楊亘は優秀な社員だったかもしれないが、まだ幹部候補というには若すぎる。その失踪の真相を突き止めようと、私兵を駆り出して明幫を相手に躍起になるのは不自然だ。ヴェリティの意向があるのかもしれないが、重化学部門の責任者を父に持っていることは、ウェリタス重工の兵力を動かすほどのことだということなのか。

「重工は、海南灘の歓楽街を野放しにしているのが許せない。楊亘のことなんて実際はどうでもいいんだろう。でもうでもいいんだろう。でも黒社会（ハクセエウイ）に圧力をかけるいい機会にはなる」

ヴェリティと岸上はその口実というわけだった。

「そういうわけで、岸上はいまや海南灘中に追われているようなものだ。ウェリタス重工と明幫に追われて、逃げられないだろうな」

「それで、あんたはどのようにしてここに来たんだ」

ジラフはやや警戒しながらも、そう聞かずにはいられなかった。岸上が楊亘を失踪させたという理由で追われているのだとしたら、黄の廠で実際に楊に毒を注射して殺したのはジラフだった。岸上だけで片がつく問題ではないように思えた。阮がここへ来た目的は、ジラフの身柄を拘束するためだと考えるのが当然だ。

「岸上となにかあったのか？」

しかし阮は逆に聞き返して来た。

「なにか？」

「二ヶ月も一緒の場所において、なにもないわけがないだろう」

「意味がわからない」

ジラフは阮の言葉をさえぎり、強く否定した。この高熱の原因が岸上であることなど、説明しても仕方がない。

阮は中年じみたのろのろとした仕草で立ち上がると、ジラフの頭に軽く手を乗せた。

「しばらくは養生しろ。治った頃に、迎えに来る」

岸上は殺されたあとに、と言ったように聞こえた。ジラフの身柄はまだ宙ぶらりんのままだということだ。

十日経って、約束通りに阮はジラフを迎えに来た。連れて行かれた先は黄の廠だった。

ジラフが廠を離れてから、半年が過ぎている。療養所ですぐに殺されなかったのだから、殺すためにここへ連れて来たのではないだろう。それでも阮はなにも言わなかったから、ジラフはやや不安を感じていた。房（へや）を開けたら腐乱した岸上の亡骸があるのかもしれない。

阮はなにも言わずにモニタールームへと歩いていく。いつものように廠には人氣がなかった。それぞれの房のなかには客がいるのかもしれないが、廊下を歩いている限りはわからない。

部屋に入ると、阮は重たそうに身体を椅子に預けた。ジラフは阮から少し離れて佇んだ。

「廠からは外す」

阮はぼそりとそう言った。その言葉の意味が読み取れず、ジラフは顔を上げる。

「外す？」

「さすがにこのまま廠には置けない」

「……どうして幫は俺を始末しないんだ。ただで済むとは思ってない」

「岸上のために調達した奴はだれかわからない、そういうことにしてある。まあつまり、うちの廠で調達したかどうかはわからないってことになっているわけだ」

あんな療養所に閉じこめられていたわけをジラフはようやく合点した。調達した本人が廠にいてはまずいからだったのだ。それは廠のためというよりも、ジラフのためだ。簡単に切って捨てる事が出来るはずのジラフを、おそらく阮がかばってくれたのだろう。

だが、そんなことを阮がしてくれる理由がわからない。確かに阮はジラフにとって兄貴分に当たるが、ジラフの調達が招いた事態はその程度で看過できるほどの出来事ではないのだ。下手をすれば、数十人単位の人死にがでておかしくなかった。

阮はジラフの怪訝そうな顔を見て、片頬をゆがめて笑う。煙草を取り出して火をつけた。

「不満か。岸上と一緒に死にたいなら、勝手にしろ」

「俺の命を助けてなんのメリットがあるんだ」

「どこにも売り飛ばすつもりはねえよ、安心しろ。それに、おまえを助けてやりたいわけじゃない。まあ、俺のおせっかいてのも多少はあるけどな。けど俺はおまえのためにやってるわけじゃない。この廠のためだ。黄の廠を守るためにやってるんだよ」

「この廠がそんなに大事なのか？ 間抜けなネクロ野郎たちを嘲笑うのだけがあんたの生き甲斐かよ！」

阮の言葉を聞いて、ジラフは自分でも思っていないほど激昂して、そう叫んだ。ちらりと岸上の姿が頭を掠める。今頃はもう死んでいるのだろうか。きっと、山ほど銃弾を埋められて殺されたのだろう。黄の廠の商品にもならないくらいずたぼろの肉塊にされて、死んだのだろう。

「そういうわけじゃない」

阮は煙を吐きながら首を振る。

「俺はこの廠を守りたいだけだ。ここが黄か白か黒か、そんなことはどうでもいいんだ。ここが俺の居場所なんだよ。おまえが岸上の弟を調達したことがやつらにわかれば、俺はこの廠を失う

」

「そうまでしてここは守りたい場所かよ」

岸上を殺してまで、と胸の奥で続ける。阮はジラフの気持ちを見透かしたように、やけに優しく肩をたたいた。

「長い話は、また今度な」

そう言うと、阮は唇に煙草を挟んだまま部屋を出て行った。残されたジラフは、ずらりと並んだモニターを見上げる。さすがにどの房にも客はいないようだった。いまは悠長に客を招き入れている場合ではないということだ。

なんの説明もされなかったから、重工と明帮のにらみあいがどうなったのかはわからない。ジラフが連れ出されたのだから解決されたと見るべきなのだろう。岸上も殺され、少なくとも今回の件に関して、重工はこれ以上の言いがかりはつけられなくなったということだ。

ジラフはふらふらとした足取りでモニタールームを出ると、一番手前にある房に入った。殺風景で、なんの調度もない白い房だ。中央には、屍体を横たえるための台が設置されている。きれいに洗い清めてあるが、いままで何人もの客がそこで屍体とまぐわった場所だ。

奥の壁に近づき、ジラフはセンサーに手をかざした。ジラフの静脈を認識した機械がロックを解除する。壁の中ほどに出て来た取っ手を握り、ジラフはそれを手前に引いた。青白く凍りついた屍体があらわれる。

いくつかの死体は常に廠に用意してあって、この亡骸もそのひとつだった。十五歳かそこらの、まだ少年の死体だった。アジア人だが、顔だけでは人種を判別できない。わりにきれいな顔をしているから、どこか黒の廠に出ていたのかもしれない。

一度、死体を元通りに壁に納める。先ほどのセンサーから解凍を指示して、しばらく待った。やがてピープ音が鳴り響く。今度は解凍されて、死体と呼ぶにははばかれるような肌色の少年が出て来た。

電磁解凍をするせいで肌はしっとり汗ばんだようで、重たく動かないことを覗けば眠っているようだ。しかし青白さは相変わらずで、それは、背面側に流れ落ちた血液が、解凍されても循環されることなく留まったままだからだ。いくら常温にしても、心臓が動いていなければ血は流れない。

ジラフはしばらくそのまま、その死体を見凝めていた。

少年の肌はあっという間に冷えてゆく。

岸上のしていたことを理解しようとした。ジラフを氷の中につっこんでまで味わいたかった快感を辿ろうと思った。だがどうやってもジラフにとって目の前にあるそれは屍であり、この世においては既に意味のないただの肉の塊にしか見えない。

岸上はこんなものに欲情したのだ。マスターベーションのための人形を抱くように自分のファンタジーに浸りながら？ それとも屍そのものに欲情したのか？ ものを言わなくなった弟に愛の言葉でも囁いたのだろうか？ ジラフを抱いたように、死体を抱きしめたのか？

なにもわからない。

弟は生きているときは岸上を愛したりしなかったのだろうか。きっとそうだろう。楊はきっと

、岸上が狂っていることを知っていたに違いない。

ジラフは廠から離れ、それまでの三年間とはまったく異なる生活を始めた。新しい家を用意され、香海路とは離れた区域で過ごしている。海南灘北部の宝砂区（バオシャークー）周辺はヴェリタス重工の膝元で、関連施設が並んでいるが、海南科学学院もその一角にある。ヴェリタス重工が日本の公立大学と共同で開設した理工大学に当たる。幫の作意があって自分がここにいるのか、阮が計らってくれただけなのかはわからないままだった。いずれにせよ、ジラフは明幫の末端の人間のままでいる。

学院の門を潜り抜けて延安路（イエンアンルー）を歩いていると、ジラフの傍に漆黒のマスターングGTⅩが停まった。スモークされたガラスに目を凝らす必要もなく、搭乗者は知れている。

振り切って逃げようかとも考えたが、暴れ馬に跳ね飛ばされるのはごめんだ。ジラフは足を止めて、ヴェリティが窓ガラスを開けるのを待った。

「ハイ、ジラフ。久しぶりね」

「なんの用だ？」

「偶然通りがかったの」

「笑わせるな。そんなこと、だれが信じる？」

「本当よ。あなたがどうしてこんなところにいるのかも知らないわ」

ジラフは肩を竦めた。本当かどうかは知らない。ヴェリタス重工の本社は近くにあるから、あながち嘘ではないのかもしれない。

ヴェリティに促されて、ジラフはマスターングの助手席に乗った。ジラフの格好を眺めたヴェリティは赤く塗った唇を吊りあげる。

「学院の学生、といった風情ね」

「その通りだよ」

ヴェリティは強くマスターングのアクセルを踏みこむ。強いGがかかるのを感じながら、ジラフはヴェリティを一瞥した。六城路（リュウシンルー）に出た車は前方の車両を次々と抜かしながら、速度を上げたまま南へと走り続ける。

「どこに行く気なんだ」

女は明らかに苛立っていた。ヒステリックなハンドルさばきで危うく車を追い越してゆく。

「ジラフ、私はもう一度あなたに聞きたいのよ。簡単な質問よ。あなたは知っているはずだわ」

「なんの話だ」

「岸上はどこにいるの」

「……死んだんじゃないのか」

岸上の話になるだろうと予測はしていたが、行方を尋ねられるとは思わなかった。岸上の末路についてはだれにも聞いていなかったが、ヴェリタス重工と明幫に追われて、逃げられるはずがない。海にでも飛びこむ他には、人に知られず海南灘から出て行く方法さえない。とうに死んだと思っていた。

ヴェリティは首を振る。

「だれも岸上を捕まえることは出来なかった。もっとも、生きてはいないでしょう。明幫が私たちとの約束を履行しなかったというのではなければね！」

「俺があいつを逃がしたと思っているのか」

「幫が逃がしたとは思えない。あの状態で、岸上を見逃す利益は明幫には存在しないわ。でもジラフ。あなたであれば、あるんじゃないの？」

「俺はあいつが追われているとき、40度の熱を出して寝こんでたんだ。あいつがどこにいるのかなんて知らない」

そう応えつつ、ジラフは鼓動が高まるのを感じていた。岸上が生きているのかもしれない。岸上が。あの男が。彼の顔が思い浮かぶ。

「あの男の夢を見るのよ」

ヴェリティがそう言った。ジラフも同じだった。岸上の夢を見る。療養所で不意に再会したように、どこかの交差点でばったりと出くわす日が来る夢を見る。氷で冷やされた身体を、かつてないくらい熱をこめて抱きしめて来た彼の欲望を夢見る。

「暗い部屋の中で、血まみれの兄さんが動いているの。苦しいんだと思って私は叫んだ。その声であいつが私を振りかえる。兄さんを黽ったまま。兄さんは血まみれで、もう本当は動かなかったのに！」

「……楊にはどうして近づいたんだ。岸上の弟だってことは、知らないわけじゃなかったんだろう」

「そうよ、知っていた。本当は私が楊を殺そうと思っていたのよ」

「なのに先を越された？」

ヴェリティはいいえ、と呟き、フロントガラスのもっと遠くを眺めるような目をした。六城路（リューシムル）は終わりに近づいている。動物がうずくまったような影を落とす療養所が見えた。その背後は東シナ海だ。沈みかけた太陽で海面は鉛色にひずんでいる。空は刻一刻と夜に染まりつつあった。

「岸上は、いつも私の大切なものを奪っていく」

ヴェリティの苦しみは、ジラフに共感してやれることではなかった。ジラフは岸上の欲望のために、金で楊を殺し、その死体を差し出したのだ。

「それで、次は俺のところに来たのか。……俺が黄の廠の仕入れだから？俺が楊を殺したから？」

ヴェリティは療養所の傍にマスタングを停めた。

「いいえ」

彼女は再び否定した。それからジラフをじっと見つめる。

「そういう格好をすると存外育ちがよく見えるのね。まさかとは思っていたけど本当にそう。あなたは楊に似てるわ、顔立ちも、傲慢な表情も！ どうして岸上はあなたに限っては死体にしなかったのかしら。あの男は人間を愛せないのよ。屍しか愛することが出来ない男なのよ。なのにどうして、あなたに限ってまだ生きていられるの？」

「俺はそんなことは知らないよ」

それは本当だった。岸上のことなど、ジラフにはなにひとつわからなかった。

ジラフはヴェリティに構わず車を降りる。マスタングはタイヤを軋ませながら方向を変え、再び六城路を走り出した。暗い通景に、いつまでもマスタングのテールランプが赤く消えない。それから目を離すことが出来たのは、夕空に星が瞬き始めてからだだった。

ジラフはその場に立ち尽くし、馬鹿げた衝動を抑えようとてのひらを握り締めていた。

なにもかも棄てて走り出したい。

岸上がどこにいるのか知らない。生きている保証はない。それでも岸上を求めて走り出したかった。もう一度出会ったとき、ジラフこそ殺されるかもしれないのに、岸上に会いたくてたまらない。だがどこに行けばいいのか、見当もつかなかった。見知らぬ監獄のように聳え立つサナトリウムの中には、もういないだろう。あのとき岸上はどこへ消えたのだろうか。市街地へはむかわなかったのではないか。まっしぐらに海にむかったのではないのか。

いまさらながら、ジラフは思い知った。岸上のことをなにひとつ知らないということ。あの男が考えていることも、あの男を生み出した環境も、なにも知らない。どこへ探しに行けばいいのかさえ、わからない。

ジラフは歩き出した。行くあてはなかったが、もはや立ち止まっていることは出来なかった。